

# 甚二郎稲荷

**む**かし、米崎(那珂町)の庄屋しやうやさんの家で、甚二郎という若者が百姓奉公をしておりました。体は小さいのですが、大そうな働き者でした。

奉公して何年かたつたある日、庄屋さんは甚二郎を呼び、「そろそろ、お前も一家をかまえてはどうだ。今までよく働いてくれたお礼に、何でもお前の望みをかなえてやろう。」といました。

すると、甚二郎は、「では、庄屋さま、田んぼの稲わらを一背負い分いただきます。」というのです。

庄屋さんをはじめ他の奉公人は、あまりの欲の無さにあきれてしまいました。ところが、甚二郎は、田んぼの稲わらを小山のように積み上げると、軽々と背負って帰っていったのです。

これには、一同びっくり。広い田んぼには、一本の稲わらも残っておりませんでした。

それからしばらくして庄屋さんは、大変なことに気づきました。

わらがなくては、年貢米ねんぐみと一緒におさめる縄なはをなうことも、次の年に使う堆肥たいひを作ることもできないではありませんか……。

困り果てた庄屋さんは、甚二郎のところへ相談にきました。すると、甚二郎は、「それなら全部お返ししますよ。田畑のない私には、もともと必要のないものです。それより、庄屋さんのところで今まで通り働かせてください。」というので、庄屋さんは大喜び。

甚二郎は、百姓頭となり、それまで以上に働いたばかりでなく、村中の人々に、親切に稲づくりの手ほどきをしたのです。

村は豊かになり、甚二郎は亡くなったあとで、農業の神様としてまつられたのでした。これが甚二郎稲荷の由来だということです。

